様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月１４日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２０２４６
研究課題名（和文）　北フリジア語の体系的構造記述—西フリジア語との比較と標準ドイツ語の影響を考慮して
研究課題名（英文）　Systematic description of North Frisian language structure —with special reference to West Frisian and Standard German

研究代表者
清水　誠（SHIMIZU MAKOTO）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１６２７１３

研究成果の概要：

西フリジア語文法に関する博士論文を北フリジア語等との比較を交えて改訂し、科学研究費補助金研究成果公開促進費を受けて出版した。同書は海外・国内の学術雑誌の書評で高い評価を受け、北海道大学大学院文学研究科中期計画の点検評価で最高度の評価を得た。フリジア語を他のゲルマン語と比較した論考の１編は日本独文学会賞を受賞した。ドイツ、オランダの学術雑誌からも３度論文執筆依頼を受け、ドイツ語とオランダ語で掲載した。申請者の北フリジア語研究はドイツで刊行された日独文化交渉史の著書でも紹介された。北フリジア語文法記述も完成した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2005 年度	1,200,000	0	1,200,000
2006 年度	900,000	0	900,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,300,000	360,000	3,660,000

研究分野：ドイツ語学、ゲルマン語学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：北フリジア語、西フリジア語、ドイツ語、ゲルマン語

１．研究開始当初の背景

本研究の背景は、申請者が過去４回、通算して 10 年間にわたる科学研究費補助金を受けて、一貫して進めてきたフリジア語研究の対象領域を拡大し、さらに発展させようとする組織的な計画に求められる。

北海ゲルマン語の唯一の後裔として、ゲルマン語の類型論的研究において重要な役割を担うはずのフリジア語研究、とくに北フリジア語研究は、日本のゲルマン語学では従来、ほとんど手つかずの領域であり、欧米でもきわめて稀である。これを行うことは、きわめて独創性の高い学問的意義を有するものであり、日本のゲルマン語研究の飛躍的向上が見込まれる。

それと同時に、ヨーロッパの少数言語に数えられるフリジア語研究の国際化に寄与す

ることが期待される。これはＥＵ統合後のヨーロッパにおいて、従来の政治的国境の相対的意義の低下とともに、新たにクローズアップされつつある伝統的な地域的言語文化の多様性と多言語使用の現代的意義について、より深い理解をもたらすことにつながると予測される。

申請者はすでに同言語の研究によって、フリジア語使用圏であるオランダ、ドイツで国際的評価を受けてきた。すなわち、1994 年にはオランダ学士院の関連機関であるフリスケ・アカデミー（Fryske Akademy）の正会員に任命され、2003 年にはオランダの在外フリジア人協会（It Frysk Boun om Utens）の名誉会員に選ばれた実績を持つ。また、申請者のフリジア語研究はオランダとドイツの新聞・雑誌で 10 回余り紹介記事を掲載され、寄稿を求められており、申請者はオランダのテレビ番組にも出演を要請されるなどして、学術面のみならず、一定の社会的な評価も受けてきている。

加えて、2003 年にはそれまでの研究成果の総決算として、北海道大学に博士論文『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究―』を提出し、同大学から論文博士（文学）の学位を得た。

今回の研究は、こうした一連の実績に基づき、十分な成果達成可能性を見越した上で展開することを目指したものである。

２．研究の目的

本研究の目的は具体的に次の３点にまとめられる。

第１に、申請者が上記の研究成果の総決算として、2003 年に北海道大学に提出した上記の博士論文『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究―』に大幅な内容的改訂を施し、その後の成果を取り入れて北フリジア語との比較を交えながら、学術書として刊行するための研究を行うことにある。

第２に、ドイツ語、オランダ語、英語、北欧語との比較を交えて、フリジア語の類型論的特徴を浮き彫りにする一連の論考を国内・海外の審査付き学術雑誌を中心に発表し、さらに複数の書籍の形でも幅広く発表することにある。

第３に、北フリジア語の体系的文法記述を試みることにある。同言語は統一的な標準語を欠く９方言の集合体であり、大陸方言と島方言に大別される。記述が極めて困難な方言も含まれるので、とくにその中で最大の話者人口を持つ大陸方言のモーリング方言（mooring）を対象として行う。

３．研究の方法

北フリジア語とフリジア語全般、および関係するドイツ語、オランダ語、英語、北欧語等のゲルマン諸語の基本資料を幅広く収集し、最新の研究成果の把握と分析の対象となる資料の確保に努める。

電子メールを活用して、関係学術機関との交流を密接にし、インフォーマント調査等によって専門的知識の提供を求め、具体的なトピックについて学問的な議論を行う。具体的には、オランダのフリスケ・アカデミー、フローニンゲン大学文学部フリジア語学科、ドイツのキール大学文学部北欧語学科フリジア語部門、ブレートシュテトの北フリジア語文化研究所（Nordfriisk Instituut）が挙げられる。これらの学術機関は、申請者が過去にドイツ、オランダへの合計３年間にわたる留学や、その後の科学研究費補助金を活用した数回の出張を通じて、関係専門分野の研究者たちと交流実績を積み重ねて来ており、研究協力体制はすでに十分に整っている。調査とする対象には書面での議論のほかに、実際の音声資料の提供とその分析も含まれる。そのため、最新のＰＣ等を購入する。

研究成果発表の方法としては、次の要領で行うことを計画した。

上記の第１の目標にかんしては、学術振興会・科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて、博士論文の大幅な改訂版を北海道大学出版会等の学術図書出版社から、『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』という題名で学術書として刊行する。また、同書の意義を国内・海外に広くアピールし、国内・海外の複数の学術雑誌において書評として取り上げられ、専門的な立場からその学問的意義を論評されることを目指す。

第２・第３の目標にかんしては、ドイツ語学、オランダ語学、英語学、北欧語学との関連を視野に入れつつ、日本独文学会、ドイツ文法理論研究会等の全国規模の学術機関が発行する審査付き学術雑誌に複数の論文を投稿し、それと併せて一般書籍としても単著・分担執筆の形で関係する複数の論考を発表するように努める。

また、国内での発表にとどまらず、フリジア語学・オランダ語学関係の審査付き国際学術雑誌に複数の論文を投稿することを目指す。具体的には、オランダのフリスケ・アカデミーが発行しているフリジア語学文学・フリジア文化論の代表的な国際学術雑誌 It Beaken、ドイツの北フリジア語文化研究所が母体となって発行している北フリジア語

学文学・北フリジア文化論の代表的な国際学術雑誌 Nordfriesisches Jahrbuch などが挙げられる。これらの一連の代表的な専門誌にたいして、複数の論文をドイツ語、オランダ語を用いて執筆し、積極的に投稿することを試みる。

４．研究成果

下記の５に記載した一連の研究成果を発表することができた。

まず、上記の第１の目標については、当初の計画通り、学術振興会・科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて、博士論文の大幅な改訂版を次の学術書として刊行することができた。

図書⑥

清水 誠,『西フリジア語文法－現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』(北海道大学出版会), xxi+799pp., 2006

同書は現存する世界最大のフリジア語の文法書であり、フリジア語学の代表的な国際学術雑誌 Us Wurk (vol. 56, 2007)、日本独文学会の学会誌『ドイツ文学』(132 号, 2007) の書評で取り上げられ、高い評価を受けた。同書はまた、申請者の勤務する北海道大学の中期計画中、大学院文学研究科の点検評価で最高度の SS 評価（当該分野において卓越した水準にある）を得た。

次に、第２の目標については、特筆に値するものとして次の論文が挙げられる。

雑誌論文⑥

清水 誠,「言語規則と普遍性―フリジア語と関連言語における名詞抱合、品詞転換、逆成―」, ドイツ文学（日本独文学会), 127 号, 49-66, 2006, 査読有

同論文は、フリジア語の語形成の特徴を他のゲルマン諸語との比較によって、類型論的に明らかにしたものである。これによって、申請者は 2008 年度の「日本独文学会賞」を受賞した。

また、次の論文も同類の方法によってフリジア語の特性を論じたものだが、これはドイツ文法理論研究会からの依頼を受けて執筆したものである。このことは申請者の研究が国内のゲルマン語研究者の間で評価されていることを示している。

雑誌論文④

清水 誠,「ドイツ語・オランダ語・フリジア語の接頭辞動詞と BE-動詞」, エネルゲイア（ドイツ文法理論研究会・朝日出版社), 32 号, p. 57-78, 2007, 査読有

さらに、次の３編の論文はフリジア語およびフリジア語に関連するゲルマン語とその文化的背景を扱ったものだが、いずれもドイツ、オランダの国際学術雑誌から依頼を受けて、ドイツ語とオランダ語で執筆したものである。これは申請者のフリジア語研究が国際的に評価されている証拠と言える。

雑誌論文①

Makoto Shimizu, “Jürgen Andersen－Der erste Schleswiger in Japan －”, Nordfriesisches Jahrbuch (Verein Nordfriesisches Institut), Bd. 44, 7-18, 2009, 査読有

雑誌論文②

Makoto Shimizu, “Besprek. Popkema: Grammatica Fries. De regels van het Fries”, It Beaken (Fryske Akademy), Jiergong 69, 142-149, 2007, 査読有

雑誌論文⑤

Makoto Shimzu, “Het Nederlands in Japan”, Ons Erfdeel － Vlaams-Nederlands cultureel tijdschrift －(Stichting Ons Erfdeel), 49ste jaargang 2, 239-246, 2006, 査読有

第３の目標については、最終年度に上述の北フリジア語モーリング方言の文法構造の記述を「北フリジア語モーリング方言文法提要」としてまとめることができた。ただし、研究期間の終盤に完成したために、現時点ではまだ印刷公表されていない。

そのほか、ドイツ語、オランダ語、北欧語にかんする題名を冠した論文および著書があるが、いずれもフリジア語との関係に言及しており、本研究の成果を生かして執筆したもので、本研究との関連において捉えることができる。

最後に、申請者の北フリジア語研究は日独交渉史を扱ったドイツで出版された次の著書 (p. 156-158) においても、申請者の顔写真つきで詳細に紹介される機会を得た。同書の著者はドイツ、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州の日独協会の会長を務める日独交流史の専門家である。このことは申請者の北フリジア語研究が日独両国の文化交流においても、歴史的な貢献として一定の評価を獲得し得たことを示している。

Peter Janocha: Spurensuche. Schleswig-Holstein und Japan von den Anfängen bis zur Gegenwart, (Neumünster, Wachholtz) 2006.

以上のように、本研究は全体として十分な

成果を挙げたと総括できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① Makoto Shimizu, “Jürgen Andersen－Der erste Schleswiger in Japan－”, Nordfriesisches Jahrbuch (Verein Nordfriesisches Institut), Bd. 44, 7-18, 2009, 査読有

② Makoto Shimizu, “Besprek. Popkema: Grammatica Fries. De regels van het Fries”, It Beaken (Fryske Akademy), Jiergong 69, 142-149, 2007, 査読有

③ Makoto Shimizu, “Tussen dagelijkse en academische taalvaardigheid － Het Nederlands en het Fries in Japan door vier eeuwen heen－”, 北海道大学文学研究科紀要, 124, 55-72, 2007, 査読無

④ 清水 誠, 「ドイツ語・オランダ語・フリジア語の接頭辞動詞と BE-動詞」, エネルゲイア（ドイツ文法理論研究会・朝日出版社), 32 号, p. 57-78, 2007, 査読有

⑤ Makoto Shimzu, “Het Nederlands in Japan”, Ons Erfdeel － Vlaams-Nederlands cultureel tijdschrift － (Stichting Ons Erfdeel), 49ste jaargang 2, 239-246, 2006, 査読有

⑥ 清水 誠, 「言語規則と普遍性―フリジア語と関連言語における名詞抱合、品詞転換、逆成―」, ドイツ文学（日本独文学会), 127 号, 49-66, 2006, 査読有

⑦ 清水 誠,「フリジア―北海沿岸を結ぶ言語の絆」,『講座世界の先住民族 第 6 巻 ヨーロッパ』(明石書店), 120-137, 2005, 査読有

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 7 件）

① 清水 誠,「フリジア語」, 梶茂樹他編『事典 世界のことば 141』(大修館), 448-451, 2009, 査読有

② 清水 誠, 「オランダ語」, 石井米雄編『世界のことば･辞書の辞典 ヨーロッパ編』(三省堂), 326-341, 2008, 査読有

③ 清水 誠, 「アイスランド語」, 石井米雄編『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』(三省堂), 360-376, 2008, 査読有

④ 清水 誠, 『ゼロから話せるオランダ語』(三修社), 169pp., 2008

⑤ 清水 誠,『オランダ語のしくみ』(白水社), 144pp., 2007

⑥ 清水 誠, 『西フリジア語文法－現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』(北海道大学出版会), xxi+799pp., 2006

⑦ 清水 誠,『現代オランダ語入門（第 2 版)』(大学書林), viii+329pp., 2005

〔その他〕

① 清水 誠/Tjeerd de Graaf/Nynke de Graaf, 付属音声資料『現代オランダ語入門別売 CD』(大学書林), 2005

６．研究組織
(1)研究代表者
清水 誠（SHIMIZU MAKOTO）
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：４０１６２７１３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし